

食の安全 農薬の話 (最終回)



日本の気候風土と有機農業

JAS法で定めた有機農産物を作るためには、3年間まったく農薬や化学合成肥料を使わないことが条件になります。そのため農家は、さまざまなりすくを背負って収穫を目指すこととなります。

もともと有機農業はヨーロッパで発達しました。ヨーロッパは日本と違い、降雨量が少なく土壌に栄養分を多く保有しています。また比較的冷涼で温和な気候は病害虫や雑草の発生を防いでくれます。

一方、日本は火山灰や洪積台地など栄養分の少ない耕地が多いことや、亜熱帯的気候の夏や高い湿度が、病害虫や雑草が発生しやすい環境をつくっています。



上/見渡す限りの牧草地。ヨーロッパでは樹木が少なく緩やかな起伏の平地が広がっている。(イギリス)

同じ雑草でもヨーロッパや北米では30cmそこそこのものが、日本の気候では2mを越す高さに成長するものもあります。有機農家が一番苦労するのが除草作業といってもいいでしょう。

ヨーロッパでは過去に氷河に覆い尽くされた期間があったので、雑草の種類が少ないといわれますが、日本には300種以上の雑草があります。広い作地を手作業で処理するわけですから、その労力は並大抵のものではありません。

ひとつの畑に同じ作物をつくり続けると害虫や病気の発生率が増えます。特に農薬を使わない場合は、ひとつの畑にいろいろな作物を少しずつ作る混作栽培などの工夫が必要になります。

このように有機栽培は大変な手間と労力が必要とされます。そのうえ、有機栽培の作物は虫食いやかたがぶぞろいなものが多く、かたちのよい作物になれた消費者には、敬遠されがちな傾向が

各地のエコマークと特別栽培農産物のマーク



あります。

こうした数々のリスクを乗り越えて、有機栽培がおこなわれています。これならば、値段が少々高くても仕方ないと理解できます。

また、有機JASの認証には毎年数万円以上、検査機関によつては20万円を超える手数料がかかる場合があります。小規模農家では費用が出せないというのが現状です。

中にはあえてJASの認証をとらずに有機栽培を実践しているところもあります。確かに認証の有無に関わらず、どういう人がつくっているのかが、わかるだけでも安心できそうな気がします。

このようにして国内で有機農業を切り開いてきた人々がいる一方で、資本力にまかせて海外からオーガニック野菜として外国基準の有機野菜を輸入する企業もできています。

また農薬や化学肥料の使用量を標準の半分に以下に抑えた、特別栽培やエコ農産物も増えてきました。これらは各都道府県の認証マークをつけて販売されています。

JAS法でも重大な被害を及ぼすおそれのある場合に限り、除虫菊乳剤・ピレトリン乳剤・マシン油乳剤・硫黄粉剤・硫酸銅ほか安全といわれる数種類の農薬の使用が認められています。

日本の狭い国土と気候条件の中で完全無農薬・無化学肥料の有機農業を実践することが、いかにむずかしいことなのか、私たち消費者も理解して、できる範囲で応援しながら上手に使い分けていきたいものです。